

地膚、若蓮、襄荷、蕃椒、木綿、蕪、薺、百合、蓼、紫蘇、蒿、苳、甘露子、牽牛子、雞冠、花鴈、來紅、萱草根、葵等なり。
〔拾遺和歌集戀十二〕けさうし侍ける女の、五月夏至の日なりければ、うたがひなくおもひたゆみて、

物いひ侍けるに、またしきさまになりければ、いみじくうらみわびて、後にさらにあはじと

いひ侍りければ、
よしのぶ

あすしらぬ我身なりともうらみおかんこの世にてのみやまじとおもへば

〔小野宮年中行事七月〕寛平二年七月十三日、正衣端笏而向西郊、再拜稽首、聞天子迎氣候而出郊殿、仍向其方恭拜也、今日立秋、七月節、故有此拜、朕雖不當其位、而躬居万機、誠致恭敬也、

〔今古和歌集秋四〕秋立日よめる
藤原敏行朝臣

秋きぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる

秋立日うへのをのこども、かものかはらに、かはせうえうしけるとともに、まかりてよめる、

つらゆき

かは風のすゞしくもあるかうちよする浪とともにや秋はたつらん

〔日本歳時記七五〕立秋、晝五十六刻十分、夜四十三刻五十分、處暑、晝五十四刻十分、夜四十五刻五十

分、月令廣義

〔日本歳時記八五〕秋分の日、考妣先祖の神を祭るべし、夏至に一陰生じてより、後陰氣日々に長じ、

日もやうやくみじかし、秋分に至りて、日夜ひとしく、寒温も亦ひとし、

〔千載和歌集冬六〕百首の歌めしける時、初冬の心をよませ給ふける、

花園左大臣家小大進

我背子が上裳のすその水かみにけさこそ冬は立はじめけれ

〔世諺問答十一月〕問て云、此月とうじと申事の侍るは、何のゆへに侍ぞや、